
語る猫と幻想郷

野雲 数夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

語る猫と幻想郷

【Nコード】

N5338Y

【作者名】

野雲 数夜

【あらすじ】

気が付いたら猫だった感じの物語。

ぶろろーぐ（前書き）

この小説は東方projectを元にした二次創作品です。

作者の妄想と勝手な自己解釈など、多分に含まれますので、あらかじめご注意ください。

ぶろろーぐ

その人は我侭でした。

その人は意地悪でした。

だから、皆に嫌われていました。

だから、いつも独りぼっちでした。

でも、僕はその人が好きでした。

何故なら、その人は僕には優しくかったからです。

その人はいつも僕に缶詰をくれます。

魚の缶詰です。

その人は蓋の開いてない缶詰をそのまま僕にくれます。

僕はその缶詰の蓋を開けることが出来ません。

その人は僕が缶詰を開けようと四苦八苦しているのをいつもニヤニヤと眺めています。

意地悪です。

僕が缶詰を開けるのを諦めて一声鳴くと、しょうがないなという

雰囲気でその人は缶詰を開けてくれます。

僕はその人に一つだけ文句があります。

その人がくれる缶詰は鯖缶です、でも僕は鮪缶が食べたいのです。

いつも缶詰を食べ終えた後に抗議するのですが、その人には僕の言葉が分からないから伝わりません。

そして、僕が缶詰を食べ終えたのを見届けるとその人は眠ってしまいます。

それを見て、僕も隣で眠ります。

その人の隣にいと、僕は寂しくないのです。

その人の隣に居れば、僕は独りぼっちじゃないのです。

でも、その人は……

ぶろろーぐ（後書き）

他に書いてる小説を書くためのモチベーションがあがらないので、別の小説を投稿してみた。

それは突然の出来事であった。

まるで、深い眠りから一瞬で目覚めたように、我輩は唐突に自己の意識を知覚した。

「はて、我輩はいつたい……」

そうつぶやいたところで、己の視線がやけに低いことに気が付いた。

「これは、一体どうなっているのであるか!？」

違和感の正体を知るため、己の体を確認した我輩は即座に異常に気が付き声をあげた。

四つの足で地面に立ち、黒い体毛で覆われた体。

「これではまるで獣のようではないか……」

我輩は、辺りを見回し己の姿を確認できるような物を探した。

「……………」

近くの地面に水溜りを見つけた我輩は、恐る恐るそれを覗き込んだ。

「……猫、であるな」

体と同じく黒い体毛で覆われ、縦に細い瞳、そして顔の上部左右

には三角形の耳。水面に映る己の顔は、まさしく猫のそれであった。

「いったい何故、我輩は猫なんぞに……」

そして、そう捨てるように言葉を吐いたとき――

「あれ……？ 我輩は……誰であるか？」

我輩は、己の記憶が存在しない事に気が付いてしまった。

しばらく思案した結果、我輩には人であったという記憶はあるが、どのような人間として生きてきたかの記憶が無いという結論に至った。

当然、そんな結論を出したところで、今現在のこの状況がどうにかなると言う訳ではないのであるが、幾分か我輩の気持ちが落ち着いたので良しとする。

「さて、問題はこれからどうするかであるな」

一人ごちて、これからの己の行動方針を考える。

「とりあえず、我輩の記憶を取り戻すのが先決であろうな」

何故我輩は猫になっているのか、記憶を取り戻せばその答えも出るかもしれない。気楽に考えられる事ではないが、いじけて何も行動を起こさないよりは大分ましであろう。

我輩は、見知った場所がないか、適当に歩いてみることにした。

我輩に残る、おぼろげな記憶に残る景色は、鉄筋とコンクリートで出来たビルの立ち並ぶ灰色の森。しかし、今現在我輩が歩いているのは、木々の生い茂る森の背の高い草の生えた獣道である。

恐らくは、どこぞの山奥なのだろうが、これほど豊かな緑にあふれる光景は我輩には見覚えのない物であった。

此処は、己の知らない場所である。

それが我輩の出した答えであった。

我輩は何故猫になり、何故此処に居るのか。このふんどと、当分の答えは得られそうにない。

そうこう考えている内に、我輩は獣道を抜けて小さい広場のような場所へ出た。

「む、あれは……」

そこで、我輩は一軒のボロ屋を見つけたのであった。屋根や壁には所々穴が開き、何かの拍子に崩れてしまいそうな、ボロ屋というよりは廃屋といった方が近い。

「丁度良い」

体感で約二時間、此処までずっと歩き詰めだったのだ。少しあそこで休むとしよう。

そうして我輩は、一休みとボロ屋へ入るのであった。

二

我輩がボ口屋に入ると、そこには先客が居た。

十歳くらいの幼い娘で、頭には我輩と同じように三角の耳、そして尻の少し上からは二本の尻尾が生えているように見える。

少女はボ口屋の屋根に空いた穴から差し込む陽だまりの中で、丸まって気持ち良さそうに眠っていた。

「奇抜な格好であるな、俗に言う『こすちゅうむぶれい』とかいうやつであるか？」

確か、架空の人物などになりきって楽しむ、ごっこ遊びの延長のような物であったか？

我輩、そういった物には疎いので、良く知らぬのである。

「らんしゃま……もう食べられにゃい……」

我輩の気配に反応したのか、少女が寝言を言いながらモゾモゾと動く。

「……………」

つい魔が差したというやつだろうか、我輩は少女に近づくと、その頬をつついてみた。

柔らかくも弾力のある、中々の触感である。

「らんしゃまあ……………」

すると今度は甘えたような声色で、再び寝言を言う少女。

「……………」

何だか少し楽しくなった我輩は、再び少女の頬をつついた。

今度は気持ち良さそうな寝顔で、モゾリと動く少女。

そして、我輩が調子にのつてもう一度少女の頬をつつこうとした、その時である。何の拍子か、突然我輩の手（現在は前足）に収納された爪が飛び出してしまったのだ。

「あ………」

そして、中々に鋭い我輩の爪が、少女の頬に突き刺さった。

「に、にゃあああああ！？！？！？」

突然自身を襲った痛みに驚いたのか、猫の鳴き声のような悲鳴をあげて飛び起きる少女。

そして、警戒するように辺りを見回す少女と、我輩の目が合った。

「お前、いきなり何するか！」

猫が相手を威嚇するようなポーズで、我輩を睨みつける少女。どうやら、少女は我輩を犯人だと断定したようである。

「すまぬ、つい魔が差したのだ、許せ」

己の非を認めぬほど狭量ではないと自負する我輩としては、ここは素直に謝っておく事にする。

まあ、猫である我輩の言葉が少女に通じる訳はないのであるが、一応の礼儀というヤツである。

「では、我輩はこれで……」

そう言つと、我輩は踵を返して颯爽と出口に向かって歩き出した。

「待て」

このままどこぞなりへ逃げて、有耶無耶にしておもうという我輩の策。それはこのボ口屋から脱出する直前、猫耳少女に首根っこを掴まれ吊り上げられた事により崩壊した。

「な、何をする！？ わ、我輩を早く放すのだ！」

ジタバタともがき、少女に抗議する。

「お前、この辺じゃあ見かけない猫^{ヤッ}だな。名前は？」

「な、名前？」

突然名を尋ねられ、我輩は困惑した。

「そうだ、早く言え」

この少女、まるで我輩の言葉が分かっているような物言いである。

「お主、我輩の言葉が分かるのであるか？」

ないと思ふのだが、我輩は一応確認のために少女に問いかけた。

「馬鹿にするな、分かるに決まってるだろ。それより、名前！」

少女は自身の質問に答えない我輩にイラつくのか、少し怒ったような表情になる。

どうやらこの少女、本当に我輩の言葉が分かるらしい。ただのこすぶれ少女ではなさそうである。

「名前か……」

しかし、どうすべきだろうか。我輩は今現在記憶喪失であり、当然己の名前など覚えていない。今即興で付けるか？

「早く」

思案する我輩を急かす少女。せっかちである。

そうして少女に急かされたとき、ふとこんな時に打って付けの台詞が我輩の脳裏に浮かび上がった。

「吾輩は猫である、名前は……まだ、無い」

渋く聞こえるよう、低めの声色で言い放つ。

これは有名な小説の冒頭の一文である。まあ、何だ……言ってみただかつたのである。

それに、我輩は猫であるし、名前がまだ（思い出せ）ないのも事実である。嘘は言っていない。

「ふーん、じゃあお前の名前は今日からカッドンな」

我輩の言葉に特に興味も示さず、勝手に我輩の名前を決める少女。

「か、カッドンであるか？」

即興で名付けられた事とそのセンスに驚愕する我輩。

あれだろうか、もしかして少女は今カツ丼が食べたいと思っているのだろうか。うむ、我輩も食べたい。

「カツドン、放して欲しければ、私の式になれ」

そういえば我輩、猫になってから何も口にしていないな、と考えていると少女が唐突に交渉を持ちかけてきた。

「式、であるか？」

何かの遊びの一種だろうか？

我輩、最近の子供には疎いので良く分からぬが、このままずっと宙ぶらりんである訳にもいかぬであろう。

先の我輩の行為も、このまま不問に出来そうである。

我輩としては、承諾するのはやぶさかではない。

ただ……カツドンという名前はどうかならぬだろうか？

式とは式神の略称のことであるらしい。

とはいえ、我輩そういうオカルト的な物についてそう詳しくはないので、いきなり式神とか言われてもちんぷんかんぷんなのであるが……。

「だから、私も式を持って藍しゃまみたいに立派になるんだ」

そんな事を思いながら、楽しそうに自分の目標を語る少女を見る。少女の名前は橙。^{ちえん}橙の言うところに寄れば、彼女自身も藍という術者の式であるらしい。

何かにあこがれる、例えば架空の物語の主人公に憧れ、それと似通った設定を作りなりきる。そういうことは、橙のような年齢の子供には良くある事である。

我輩、藍という者のことは知らぬが、式神等難しい言葉を使っているあたり彼女の設定は中々凝っている様である。

「ふむ、それで我輩を式にしようと考えたのであるか。それで、いったい何をすれば我輩は橙の式になるのだ？」

我輩、子供は嫌いではない。それに、ここが何処かも分からぬ身の上である、しばしこの娘に付き合うのも良いだろう。

「え、えーっと……」

我輩の質問を受けて、何やら考え込む橙。どうやら、まだ式神を作る方法は考えていなかったようである。

「もしや、橙はその方法を知らぬのであるか？」

率直に尋ねる。

このまま橙が我輩を式神にする方法を思いつくまで待つても良いのだが、中々に時間が掛かりそうである。それは今の我輩にとって好ましくない。

「う、うん……」

我輩の質問に小さく首を振る橙。どうやら我輩の考えた通りであったようだ。

「ならば橙よ、誰か知っている者を尋ねるのはどうであろうか？」

式神などと言う言葉が、いきなり子供の口から出るなどという事はまずない。何かの本から仕入れた知識という線も考えられなくはないが……正直、橙はそういうタイプではないだろう。

恐らく、橙の近い者の中にそういったオカルト的な物に詳しい人物がいて、その者から色々と教わったのではなからうか？

そう考えた我輩は、橙に助け舟のような物を出したのである。

「あーうん、藍しゃまと紫さまなら知ってる」

少し考えるそぶりを見せたあと、橙の口から二人の人物の名前が出てきた。しかも、その片方は橙が先ほど語った憧れる人物と同じ名前である。

「ふむ、藍というのは、先ほど橙が目標だと言った者の事であるか？」

「うん！」

何やら嬉しそうに頷く橙、耳と尻尾が彼女の感情を表すように動いている。どういうギミックなのであろうか。

どうやら、藍というのは実在する人物だったようである。

「よし、早速聞きに行こうではないか！ 橙よ、その者達は何処に居るのであるか？」

そう言つて、我輩は橙を促した。

「紫さまは……多分寝てるけど、藍しゃまなら人里にいると思う」

「人里、であるか？」

妙な言い方である。例えどんなに田舎であろうと、村なら村、町なら町等、人が住んでいるのならその場所を表す名前があるものである。

人里などという大雑把な言い方では、何処のことを言っているのか分からない。にもかかわらず、橙は場所を特定するように人里という言葉を使った。

まるで人里が一つしかないような、そんな妙な言い方である。

「膳は急げである。橙よ我輩場所を知らぬ故、案内を頼むのである」

「あ、待つてよカッドン」

橙の妙な言い回しに引っかけかりを覚えながら、我輩は人里を目指しボ口屋を後にするのであった。

四

ボ口屋を出発してから、体感でおよそ二時間。我輩達は人の集落へ到着した。

「此处が人里、であるか……」

「うん、藍しやまいるかなー？」

我輩の問いに頷き、左右を見回す橙。それを横目に、我輩も辺りを見回す。

一言で言うのであれば、『古い』であろうか。

思えば、この人里まで来る道中もそうであった。一本の電灯も無いように整備されていない道、人里に立ち並ぶ建物、そして人々の服装。

全てが古来の、まるで日本の原風景を思わせるような、そんな古い光景。

科学の発達した現在の日本において、いくら田舎といっても、いくら山奥といっても、これほどその痕跡が見られないというのはありえないことである。

まるで昔にタイムスリップしたかのような、不思議な感覚。夢でも見ているかのようなのである。

だが、踏みしめる地面の感触と土草の匂いが、いくらあり得なかるうともこれは現実であると我輩に教えていた。

猫になった事といい、本当におかしな事態になっているようである。

「また何か悪さでもしに来たのか？」

我輩が妙な事態に陥った自身の状況を憂いていると、前方、つま

り人里の中から声が掛けられた。

「うにゃ！？」

「うぬ？」

声を聞くやいなや、突然橙が素早く後ろに跳躍した。そして手足を地面に着け、猫のような姿勢をとった。

「あー！？ お前はいつかのカクカク帽子、あの時のウラミだセー
バイしてやる！！」

そして、橙は声を掛けてきた者を指差し、唸るように叫ぶ。まるで臨戦態勢になった猫のようである。

橙の視線の先には一人の女性が立っていた。全体的に青い色合いの服装に、染めているのか白髪の中に淡い青色の髪でゼブラ柄のようになった長い髪、そして何より頭の上の寺か何かの建造物を思わせる帽子が特徴的であった。

橙に続いて、またしても奇抜な格好である。

「カクカク帽子ではない、慧音^{けいね}だ！どうやら、仕置きがたりなかったらしいな」

肩幅に足を開き胸の前で腕を組むと、慧音と名乗った女性は威圧するように橙を見つめた。

しばし無言でにらみ合う二人。

「い、いくぞ！！」

沈黙に耐え切れなくなったのか、先に動いたのは橙であった。左右にフェイントを入れるようにして機敏に飛び回る。

「てやあああああ!!」

そして一気に間を詰めると、女性に飛び掛った。

「ふん……」

しかし、まったく動ぜず悠然と構える女性。橙がどのように攻撃してきても、まったく問題ないといわんばかりである。

「甘いわあ！成敗!!」

そして、その怒声と共に、女性は己の額をカウンターの要領で橙の額に叩きつけた。
目をつぶりたくなるような、鈍い音が鳴り響く。

「みぎや!?!」

地面に倒れて小さく痙攣する橙。近づいて確認してみると、どうやら失神しているようである。

「失礼。我輩、この娘が何をしたのかは知らぬが、少しやりすぎではないかね?」

子供に本気でヘッドバットをかますとは、仕置きだとしてもやりすぎである。

我輩は女性に声を掛けた。

「ん? 何だお前は、コイツの仲間か?」

橙を指差し、にらみ付けるようにして我輩に尋ねる女性。

「ほんの少し前に出会ったばかりの関係である。だが、ここまで送ってくれた恩人なのだ」

我輩は一呼吸おくと、女性をにらみ返した。

「もう一度聞ぐが、仕置きとしても少々やりすぎではないかね？」

猫である我輩がこの女性に敵う道理はないだろうが、それでも絶対に引けない線はあるのである。

五

「幻想郷、であるか……」

人里の一角にある寺子屋（近世く近代の庶民教育機関）にて、我輩は慧音と向かいあつて話をしていた。そこに先ほどの剣呑な雰囲気は無い。

寺子屋の中は、教室である2く30人位は入れそうな大きめの部屋と職員室兼慧音の生活スペースである小部屋、あとは流しと廁という造りになっている。

その寺子屋の職員室にて、慧音は椅子に座り、我輩は彼女と目線を近づけるために机の上に乗っていた。

あの橙と慧音の喧嘩沙汰の後。人目が増えてきたから場所を変えようという慧音の言葉にしたがい、現在誰もいないというこの寺子屋へやってきたという訳である。

慧音の言う所によると、妖怪・妖精・魔法使い、ここはそういう科学技術の進歩により否定され、忘れ去られた者達の最後の樂園だという。そう語る慧音自身や橙も人外であるらしい。

ここ人里は幻想郷で唯一人が安心して暮らせる人の集落であり、慧音はその守護者としてこの人を狙う妖怪達を撃退しているのだという。

橙に関しては、以前人里で悪さをした事があり、反省もしていないようであつたので退治したとのこと。

そつという理由なら、あの見るからに強烈そうなヘッドバットも領ける……のであるか？

正直、基準が良く分からんのである。

「……………」

我輩は部屋の片隅にて、慧音の物と思われる布団に寝かされた橙を窺う。頭突きを喰らってすぐはまったく動かぬ状態であったが、次第に寝息をたてはじめたので安心したのである。

ちなみに、橙を寺子屋まで運んだのは慧音である。彼女は失神する橙を軽々と持ち上げると、楽々と寺子屋に運んでしまったのである。

にわかには信じられぬ話であるが、慧音が嘘を言っているようには見えない。どうやら、我輩が『こすぶれ』だと思っていた橙の耳や尻尾は本物だったようである。

時折、小さく動いていた謎が、ようやく解明された。

「しかし、気がついたら猫になっていて、そのうえ記憶喪失とは……カッドン殿も大変だな」

慧音が我輩の身の上を心配するように話しかけて来る。すでに彼女には、我輩が猫になってからの経緯は話してある。

「大変か……うむ、そのはずなのであるのだが……。何故だか我輩、あまり悲観的にはなっていないのだ。むしろ、未知への好奇心というかな、そのような物で妙に高揚しているのである」

見知らぬ場所へ迷い込む、迷子になり帰り道すら判らなくなる、普通なら不安に駆られるであろう現在の我輩の状況。にもかかわらず、今の我輩は妙に楽観的だ。

不思議な事もあるものである。

まあ、恐らく色々ありすぎたせいで、我輩少しおかしくなっているのであるう。

「ふむ、それでカッドン殿は、これからどうするお積りか？」

唐突に話題を変える慧音。

「慧音殿？ どう、とは？」

「先ほども話したと思うが、ここ人里は幻想郷で唯一人が安心して暮らせる場所、話を聞く限りでは貴方は人のようだ。よければ仕事や住む場所を提供するが、どうかな？」

仕事に住む場所、確かにそれは人として生きていくのなら必要なモノである。

「ふむ、住む場所は良いとして、仕事はどうするのであるか？ 我輩、猫であるぞ」

猫の手も借りたいという言葉はあれど、実際猫に手伝える仕事など無い。少なくとも、我輩には思いつかない。

事実、今の我輩の体では、簡単な作業でさえこなす事は出来ないであろう。

「カツドン殿は、簡単な足し引きは出来るか？」

再び、話題を変える慧音。計算出来ることが、何か今までの話と関係あるのだろうか？

「それは、まあ出来るが……」

「ならば、私の手伝いを頼みたい」

我輩が答えるやいなや、慧音は腕を組みそう言った。

慧音は人里の守護者という以外に、普段は寺子屋の教師をしているらしい。

はて、慧音は我輩に何をせよといふのであつたか？

六

慧音の私室、作業机の上にて、我輩は自分の目の前に敷かれた紙を睨み付けていた。

「……………」

我輩の右隣では、慧音が同じように一枚の紙を睨みつけている。慧音の右手には一本の筆が握られており、彼女がそれを動かす度に赤いマルやバツが紙に書き込まれていく。

慧音は一度最初から紙を見直すと、机の右端に積まれた紙の山にその紙を重ねた。そして彼女は机の中心積まれた紙の山に手を伸ばすと、そこから一枚紙を手に取り、再びマルとバツを書き込んでいく。

そんな慧音を横目に、我輩も作業を進める。

2 5 + 1 6 = 4 1、2 6 - 9 = 1 7、1 8 + 1 3 = 2 1。

我輩は紙に書かれた数式の内、4 1の上に自分の左手を押し付ける。我輩が手を離すと、肉球形の赤い印が4 1に重なるように表れた。

続けて、1 7の上にも朱肉の赤色がベツトリと付いた左手を押し付ける。

2 1は飛ばして次の数式へ。

全ての数式を確認し終えた我輩は、見ていた紙を自分と慧音の間へ移動させた。

「……………」

我輩が紙を移動させるやいなや、慧音がその紙を見て数字を書き

込む。そして彼女の手で右端の紙山へと重ねられた。

それから、我輩は左手で机を汚さぬように注意して、机の中央に積まれた紙の山から新たな紙を自分の前に移動させる。

「……………」

「……………」

我輩と慧音、共に無言で目の前の答案用紙を確認する。

現在、我輩が何をしているのかというと、見ての通りテストの採点である。

「慧音殿、山が減っているように見えぬのだが……一体何枚あるのであるか？」

手を動かしながら、我輩は疑問に思ったこと慧音に問いかけた。

この寺子屋の教室は入って精々三十人程の広さであるし、教師も慧音一人であるという。彼女が受け持つ生徒は多くとも五十人位であると予想できる。現在採点をしているのは算数だけだが、それだけでも二百枚は超えているように思える。

「二百四十三かける五だから、千二百十五枚だな。いやあ、中々採点する時間が取れなくてな、テスト三回分も溜め込んでしまっていたのだ」

黙々と採点をこなしつつ、慧音が我輩の問いに答える。

「ということは、生徒は八十一人であるか。慧音殿一人で受け持つには、少々多く感じるのであるが……？」

他に誰か教師はいないのであろうか？

「はは、それが最近の悩みの種だよ。昔は生徒の数もそれほど多くなかったから良かったのだが、段々と寺子屋に子を行かせる家が増えてきてな……今じゃあ教師不足でこのありさまだ」

山積みの答案用紙を指しながら、吐き出すように言う慧音。

「我輩の他に、試験の採点を手伝ってくれる者は居らぬのであるか？」

他に教師が居ないことは、まあしょうがないとしてだ。今我輩がやっているような簡単な計算問題の答え合わせ位、頼めば誰か手伝ってくれそうなものであるが……。

「ああ、本当なら妹紅が手伝ってくれる予定だったんだがなあ……はあ」

そう言つて、少し哀愁の漂う表情でため息をつく慧音。
モコウというのは慧音の友人が何かだろうか、彼女の様子からその人物と会つのを楽しみにしていた事がうかがえた。

「そのモコウというのは――」

我輩がその人物について訪ねようと口を開いたとき、突然寺子屋の玄関の戸を叩く音が響き、我輩の言葉は中断された。

「む、誰か来たようだ。私が見てくるからカツドン殿は採点を続けてくれ」

慧音は作業をやめ椅子から立ち上がると、そう言つて部屋を出て

行つた。

「ふむ……」

慧音が出て行つた戸を眺めながら、我輩は考える。

採点を続けてくれと言われたのだから、この場合は採点を続けるのが良いはずである。だが、一体だれが尋ねてきたのか気になるのも事実。

「よし、我輩も行くのである」

誰に言うでもなくそう言つと、我輩は左手を近くにある手拭でぬぐい机から飛び降りた。

そして、半開きの戸の隙間を通り部屋を出ると、そのまま慧音と誰かが居るであろう玄関へ向かい歩き出した。

七

「夜分遅くに失礼する」

慧音が寺子屋入り口の戸を開くと、そこに居たのは金髪と金毛で覆われた複数の大きな尾を持つ女性だった。

女性に言われて、慧音は辺りがすっかり暗くなっている事に気がついた。採点に集中し過ぎていたようだ。

「む、八雲の狐か。私に何か用事か？」

彼女の名前は八雲やくも 藍らん。ここ幻想郷の管理者とつたわれる大妖怪、八雲やくも 紫ゆかりの使いで、九尾の狐だ。

たまに買い物をしている姿を見かける程度で慧音とはあまり面識はないが、管理者の使いが態々夜遅くに尋ねてきたのだ。恐らく何事が起きたのだろう。

新手の妖怪でも現れたのだろうか？

人里の人間は襲わない、それが幻想郷に住む妖怪達の暗黙のルールだ。そも妖怪とは人間から生まれた様なもの、人間がなくて妖怪は存在できない。

そんな妖怪達が消えないように滅びないようにするため、その為のシステムとして人里はあるのだ。

外の世界からやってきたばかりの、新参の妖怪はそのシステムを理解していない。暗黙のルールなど知らずに、人里を襲う。

彼等は非常に厄介な存在なのだ。

慧音は腕を組み、少し目を細めて藍の言葉を待った。

「実はな……」

何やら重たい雰囲気をかもし出しながら、藍が口を開いた。雰囲気に圧され、つばを飲み込む慧音。

「橙が、何処にも居ないのだ……」

「……………は？」

まるで世界の終わりを告げるかの様に告げられたその言葉に、慧音の思考が一瞬停止した。

「い、いま何と……？」

自分の聞き間違いかもしれないと、藍に尋ねる慧音。

「だから、橙が何処にも居ないのだ……。今日は橙の好物のカツ丼を作るから、家で待っているように言っておいたのに……」

そう言つと、藍は泣き崩れるかのように地面に座り込み、そのままうなだれてしまった。

よく見れば、何かに引っ掛けたのか藍の衣服は所々破れており、履物もだいぶ汚れている。相当な時間探し回っていたようだ。

この九尾が探している橙とは、昼間に慧音が頭突きを喰らわせ気絶させた、あの橙のことである。

「はあ、それだけか……。それなら――」

「貴様、この一大事に『それだけか』とは何だ！」

突然起き上がった藍に服の襟元をつかまれ、慧音は言葉を中断させられた。

藍は橙を溺愛しているのだ。

慧音は、自分の考えが杞憂に終わった安堵から、言葉を選ばなかった事を少し後悔した。

「ちえ、橙なら寺子屋^{うち}で寝ているっ……！ 安心しろー！」

慧音は自分の首を絞めるように服を掴む藍の手を力づくで引き剥がすと、よれた衣服を正しながら彼女に言った。

「そ、そうか……。取り乱してすまない」

安心したようで、藍は全身の力が抜けたように再び座り込んだ。そして、自分の行動を思い返してか、小さく頭を下げた。

「いや、私もお前の気持ちは分からなくはない。別に良いさ、ほら
そう言つと、慧音は座り込む藍に手を差し伸べる。

「ああ、すまない」

藍が手を握るのを確認して、慧音は彼女を引っ張り上げた。

「慧音殿、そちらの方がお客かね？」

服の汚れを払う藍を橙のところへ案内しようとした時、いつの間にやって来たのかカッドンが私の横に座っていた。

「か、カッドン殿！？」

「いつの間に……」

突然声を掛けられたことに、驚く慧音と何やら関心するように頷

く藍。

「我輩、結構好奇心旺盛な性質であるようで、気になって来てしまったのである」

真面目なのかそうでないのか、なかなか掴めない御仁だ。

「ううん？ 妖怪かと思えば、妖力は無い様だし……なあ白沢の、何だコイツは？」

そして、いつの間にやら履物を脱いだ藍が、カツドンの前にしゃがみこみ指差しながら慧音に尋ねた。

「慧音殿、いきなり我輩を指差すこの輩は誰であるか？」

慧音は案内の前に、互いの紹介を済ませた方が良いと判断するのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5338y/>

語る猫と幻想郷

2011年12月31日07時47分発行